SS 研 2004 年 9 月 21 日
Crocker, J., & Wolfe, C. T.(2001)

Contingencies of Self-Worth

Psychological Review, 108, 3, 593-623
Rep.脇本竜太郎[1]

0.Introduction(p593)

◇自尊心(self-esteem)は主観的経験と生活の質の中心的側面であり，個人の日常の経験の感情的トーンに影響を与える変数(ex.不安や生活への満足等)と強く関連している．

➢Diener(1984)：アメリカにおいて，自尊心は生活満足の最も強い予測変数(収入や年齢，身体的健康等の人口統計学的・客観的な変数や他の心理学的変数と比して)

◇自尊心への興味を加速させたもの
…低自尊心が社会的問題(ex 攻撃，学業不振，摂食障害，10 代での妊娠等)を引き起こし，自尊心を上げる介入がそれら問題の解決を促進するという示唆

→California Task Force to Promote Self-Esteem and Personal and Social Responsibility に集約される自尊心運動(self-esteem movement)の発動(Mecca et al.,1989)：主に学校で実施されるプログラムにより，学業成績が向上するだけでなく，社会的問題の解決も促進されるであろうという想定

◇自尊心運動に対する批判
・低自尊心が社会的問題の症状ではなく，原因であるという証拠の乏しさ(Baumeister, 1998；Dawes, 1994；Smelser, 1989)
・自尊心が主観的感覚ではなく行動と関連しているという証拠の乏しさ
・単に自尊心を上げるために費やされた資源は，基礎的学習スキルを向上させ，実際の達成に根ざした自尊心を与えることにより効果的に使えたかもしれない
(Baumesiter, 1998；Dawes, 1994；Seligman, 1998)
←実際の達成に基づかない自尊心は，他人への暴力や他の望ましくない結果を生む
(Baumesiter, 1998；Baumeister, Smart, & Boden, 1996)

◇筆者らは，自尊心運動とそれに対する批判が，あまりに単純な自尊心観に基づいていると考える．その自尊心観とは，特性的自尊心の高低だけに焦点化したものである．特性的自尊心の高低は自尊心の 1 側面にしかすぎず，行動の原因としてはあまり重要ではない．最近の研究では，自己価値の条件(contingency of self-worth)と，その結果生じる自尊心の不安定性が，自尊心と行動の関連を理解するためにより重要な側面であることが

[1] 東京大学大学院教育学研究科博士課程
E-mai:wyvern@p.u-tokyo.ac.jp；

示されている．

本論文では自尊心が基づく条件を強調したモデルを呈示する．このモデルは，自尊心がいかに認知・行動・感情・動機づけに影響するかを詳細に説明し，自尊心の性質に関する既存の論争を解決し，矛盾に意味を与え，新しくまた重要な研究の方向性を示し，いつ，どのように，誰にとって自尊心が社会的問題に影響を与えるのか理解する道を示すものである．

1.A Model of Global Self-Esteem and Contingencies of Self-Worth(p594)

◇自尊心という言葉は多くの意味を持つ

・領域一般(global)か，領域固有(domain-specific)か

・特性的か，状態的か

◇本論文では，“自尊心”という言葉は，領域一般的なものを指す[2].

・人は平均的，特性的な自尊心を持つが，一時的・状態的な自尊心の判断はその平均的なレベルを中心に変動する

・領域固有の自己評価にも同様に特性的レベルと状態的レベルが存在

◇領域固有の自己評価が等しく自尊心にとって重要なわけではない．

・自尊心の条件になっている(contingent)領域における自己評価のみが，全体の自尊心に影響を及ぼす．

・どの領域が自尊心の contingency になっているかには個人差が存在(Coopersmith,1967；Harter, 1993；James, 1890)

→ある人にとっては有能さが自尊心の条件であるが，他の人にとっては他者からの受容が自尊心の条件である，など．

◇自己価値の条件は階層的に組織化されている．

・広い，上位の条件(ex.善を成す)に，関連した従属する条件(ex.正直である，友人に誠実である等)が含まれている

・条件間には接近可能性の差異も存在．また，自己価値の条件は記憶の中に貯蔵されている他の要素と同じように，状況の手がかりによって活性化される．個人の自己価値がある領域に条件づけられていればいるほど，その条件は慢性的に接近可能で，活性化されやすくなるようである．

◇特性的自尊心とそれを中心とした状態的自尊心の変動は，自己価値の条件という観点から理解できる．

・特性的自尊心：普通どのくらい自己価値の条件を満たせている(と信じている)かの関数

・状態的自尊心：自尊心の条件となっている領域でのイベントに応じた自尊心の変動

■状態的自尊心に関して

[2] 領域固有のものは自己評価(self-evaluation)と呼んでいるようです．モデルとしてはやはり領域一般，領域固有双方を扱います．

・イベントや環境の自尊心に対する影響は，それらと自己価値の条件の知覚された関連性に依存する[3].
・状態的自尊心は，外的・内的イベントが自己価値の条件に関連している時に，それらイベントの解釈によって変動する.
・自己価値の条件になっている領域内のイベントは，それがはっきりとポジティブ／ネガティブである場合，また個人の人生にとって重要であるほど状態的自尊心に影響する.
■特性的自尊心に関して
・James(1980)の特性的自尊心観“直接的で初歩の性質”…自己価値の条件となっている領域における成功・失敗とは関係ない
・本モデルでは，特性的自尊心は人がおかれている持続的な環境，自己価値の条件，条件に関連したイベントを条件を満足するものと捉えるかそうでないものと捉えるかの慢性的傾向によって影響されると仮定する.
→特性的高自尊心は，自己価値の条件を満たすことあるいは満たしていると思うことを可能にする環境や活動の結果．一方で特性的低自尊心は，条件を満足するのが難しい環境や活動に捉われてしまった結果.
→環境が劇的に変われば特性的自尊心も変動しうる(学校の卒業，配偶者との死別など).また，人はその環境の変化に応じて自尊心の条件を変化させうる．但し，上位の条件は変更しにくい.

◇自己価値の条件の性質
■条件間で達成しやすさに違いが存在
・(ex)他者からの受容という条件は，多くの人間からそれを安定して得ることができるわけではないので，低特性自尊心や状態自尊心の不安定さにつながりやすい．一方，神の愛という条件は，信じ込んでしまえるので達成がたやすい.
■比較的安定しているが，人生の経過において変化しないわけではない
・自尊心の条件は多くの社会化，社会的影響(養育者との相互作用や文化的価値観，観察学習)に応じて発達
・環境や，自己価値の条件を満たす能力に変化が生じると，人は新しい環境に適応し，以前のレベルの特性的自尊心を獲得するために自己価値の条件を変更する.

1-1. Self-Esteem, Contingencies of Self-Worth, and Implications for Cognition, Affect, Motivation, and Behavior

◇自己価値の条件とそれに基づく状態的自尊心の変動は，特性的自尊心のレベルとは異なった形で認知，感情，動機づけ，行動に影響する.
・自己価値の条件は，条件に関連した情報やイベントに注意を方向づけると仮定される.
・イベントが自己価値の条件に関連しているほど，そのイベントに対する感情的反応は強い
・行動は自尊心の高低よりも，自尊心の実際の変動もしくは変動の可能性によって動機付

[3] James(1890)まで遡ることのできる発想.

けられる.

◇他の個人内の基準(self-standards)と同様，自己価値の条件となっている領域で失敗を避け，成功のため前進するには，多くの認知的・行動的方略が利用可能.
あるルートで自己価値の条件を満たすことに失敗した場合，ひとは努力を増やしたり，撤退(withdraw)したりする．撤退には，より上位の条件を満たすために他のルートを探すこと，完全に条件を入れ替えてしまう(ex.私は優秀ではないが親切だ)ことが含まれる．他に，条件は変えないが，条件を満たせないような状況を物理的に避ける，という対応をする場合もある.

1-2.Contingencies of Self-Worth and Social Problems

◇社会的問題は，人が人生にとって重要な領域(ex.学業)から撤退してしまったり，自尊心の条件を他者もしくは自己にとって犠牲の大きい，破壊的な方法で満たそうとする時(ex.痩せるために麻薬を使う)に生じる．また，自尊心の条件になっている領域での自我脅威によるネガティブ感情に対処しようとすることによって社会的問題が生じることもある(ex.アルコールの濫用)

1-3.Resolving Debates About Self-Esteem

◇自尊心に関するいくつかの議論に対する本モデルの立場
・自尊心は特性か，状態か？
→両方.
・自尊心は領域固有の評価に基づくのか,領域固有の評価が自尊心から引き出されるのか？
→自尊心は自己価値の条件となっている領域における成果に基づく
・防衛的自尊心と真に高い自尊心の区別
→防衛性に拍車をかけるのは，自我脅威情報に対する状態的自尊心の変動．自己価値の条件になっていない領域では,自己の失敗や欠点,責任を非防衛的に認めるのは容易．しかし，自己価値の条件になっている領域では，自尊心の低下は苦痛の大きいことであり，結果，ネガティブ情報の否認や無視，自己関連性や情報の信憑性の評価を下げるといった反応が生じる.

1-4.Contingencies of Self-Worth and Social Stigma，Aging，and Depression

◇自尊心が，他者からどう観られているかという信念に基づいているという理論的見地(Cooley,1956a；Mead,1934)からの予測
→スティグマを与えられている集団の構成員は低自尊心を患うであろう
←しかし，知見は一貫せずまた，集団間，また同じスティグマを共有する集団内で自尊心に大きな分散が存在
⇒本モデルからは，他者からの承認がどの程度自己価値の条件になっているかという点に個人差が存在するためにこのような分散が生じるのだと考える.

◇年齢を重ねれば自己価値の条件となる領域の喪失(対人関係や職業，身体的魅力の喪失)

や現象を経験するにもかかわらず，自尊心が加齢とともに低下するわけではない.

→人が加齢に伴って自己価値の条件を修正し，大抵の場合，より選択的で内面的な条件を採用するため，加齢に伴う喪失が一般的に well-being の低下につながるわけではない

2.Relation to Other Theoretical Frameworks

◇自尊心の特性的レベルのみならず，変動と自己価値の条件を考慮している本モデルの他の理論・モデルとの差異

■状況間での自尊心の変動を根底にある性格特性との関連で理解することができる

➢Kernis らの一連の研究(Kernis & Waschull，1995 for a review)

・性格特性としての全体の自尊心の不安定性に着目．自尊心の不安定性を個人内の自尊心の標準偏差で操作的に定義

⇔本モデルで問題とするのは，特定の状況における自尊心の変動のパターンを生ぜしめる自尊心の条件．また，本モデルでは自尊心の変動そのものを性格特性としては考えず，自己価値の条件とその個人がおかれた状況によって生じるものと考える.

■本モデルでは自尊心の“条件”を強調するが，それは Rogers(1951)，Deci & Ryan(1995)などのいう“条件付の自尊心”(contingent self-esteem)とは異なる．行動は自尊心が真のものか条件付のものかということの関数ではなく，人が自己価値の基盤をどの領域に置くかということに依存.

■本モデルは自己高揚中毒の解毒剤たるものである．多くの理論的アプローチは人が自己高揚に動機付けられていると想定し，自尊心を高揚・維持・防衛するための方略を同定している．これらアプローチからは見かけ上“不死身の自尊心”(invulnerable self-esteem)という姿が浮かびあがる[4]が，それは自尊心の一側面でしかない．領域次第で自尊心の脆さが浮かび上がる.

■本モデルは自己価値の判断が変動する環境に関する理論であるため，自己に関する脆弱性の理論と類似点を持つ．代表例は self-discrepancy 理論

➢Moretti & Higgins(1990)：特性的自尊心は現実自己と理想自己の乖離の関数

・但し，重要な相違点が存在

①self-discrepancy 理論は少なくとも明示的には脆弱性が存在する領域の理論ではなく，乖離を問題とする理論

②上述の研究は特性的自尊心に着目するが，本モデルでは自尊心の変動の説明を企図している

③理想自己は自尊心の条件のみならず，それ自体は自己価値とは関係のない文化的もしくは状況的に重視されている理想に影響を受ける

…本モデルは，乖離が自尊心低下に繋がる特定の領域を同定するのに有用.

[4] そんなことを言っている理論を見たことがないのですが，そうなんでしょうか？

■本モデルは，“特定の領域において脆弱性(他者への過剰な依存や極端に高い理想)を持つ個人は抑鬱に陥りやすい”という臨床研究における発想と明確な関連を持つ．
しかし，本モデルは脆弱性(=自己価値の条件)の性質についてより正確である．また，本モデルでは，自尊心の変動，より特定的に言えばその継時的な蓄積の効果[5]が抑鬱の病因として重要だと主張する．

■他の多くの自尊心に関する理論と異なり，本モデルでは自尊心と行動の自己制御を直接に関連付ける．
→自己価値の条件は自己基準(self-standard)の 1 種と考えられるため
・自己価値の条件は，いくつかの個人的目標(personal goals)の基盤となる．自己価値の条件に基づく目標は影響力が強い．
←そのような目標達成に失敗することはネガティブ感情のみならず，自尊心の低下につながるため．また，そのような目標からは脱却しにくいため．

3.Evidence for the Role of Contingencies of Self-Worth

◇自己価値の条件が人によって違うことは 1 世紀以上前に James によって示唆されているが，自己価値の条件に関する研究はせいぜい散見される程度である．以降では，
①自己価値の条件は人によって異なる
②特性的自尊心は，少なくとも部分的には自己価値の条件の関数である
③自己価値の条件となる領域での成功・失敗によって状態的自尊心が変動する
④イベントが自己価値の条件に関連している時に，それに対する感情的反応が強い
⑤自己価値の条件が曖昧なイベントの解釈を方向づける
ことに関する証拠を提示する．

3-1.Selectivity in Contingencies of Self-Worth

◇人が自尊心の基盤を置く領域に関して選択的であるという発想は，古くから自尊心の理論の中に見られる．多くの心理学の領域のなかで頻繁に登場する主要な自己価値の条件は，社会的承認(social approval)と有能さ(competency).
→しかし, この代表的な自己価値の条件をどのように測定するかについては合意がない.
➢Coopersmith(1967)の自尊心調査票：特定の領域での自尊心の値から全体の合成得点を算出←しかし，この方法では自尊心がその領域にどの程度基盤をおいているのかわからない
➢領域の重要さの評価(Marsh,1986)，領域の自我関連性(Tesser,1988)，理想自己(Higgins et al,1986)
←これらの概念は自己価値の条件と似てはいるが，あくまで近似値でしかない．なぜなら特性というのは，他の様々な理由(文化的価値観，重要他者にとっての重要性)で重要になったり，自我に関連したりするからである．

[5] 変動ということを考えれば，ポジティブなイベントもネガティブなイベントも抑鬱に寄与する．

◇そこで筆者らはより直接的に自己価値の条件を査定する尺度を開発[6].

➢Crocker, Luhtanen, & Bouvrette (2001)：1300 人超の大学生に対する調査

・ヴァリマックス回転を伴う因子分析の結果，7 つの解釈可能かつ理論的に有意味な予測どおりの因子を抽出

…承認，容姿，神の愛，家族の支援，学校での有能さ，競争，美徳

・700 名余が大学入学前と 1 学期終了後の 2 回当該尺度に回答．…各下位尺度の再検査信頼性は.60～.85 と比較的良好.

・標準偏差の値から，自己価値の条件の分散が大きいことを示している.

→この分散の一部は性別と民族性の差異に関連→Table1

◇先述のように本モデルでは条件付自尊心の程度ではなく，人が自己価値を置く領域に着目.

・確認的因子分析でこのアプローチを支持する結果

…“条件付自尊心”という 1 つの因子を想定するモデルよりも，理論的に仮定された 7 つの因子を想定するモデルの方が適合度がよい(Crocker, Luhtanen, & Bouvrette, 2000)

…学校での有能さと競争(達成に関連する因子同士)，承認と容姿(一般的他者からの承認に関する因子)に高い相関．また，達成に関連する因子と賞賛に関する因子と相関.

←いくつかの理論的アプローチ(Beck et al.,1983 等)は有能さと承認を競合するものと考えられているが，少なくとも達成を通して承認を得ることの多い大学生では 2 者は強く関連するのであろう.

…神の愛は他の条件とは無相関.

3-2.Contingencies of Self-Worth and Trait Self-Esteem

◇特性的な自尊心のレベルは気質等あらゆる要因に影響を受けるが，本モデルでは，自尊心は継続的な環境，自己価値の条件，条件に関連したイベントの解釈の傾向にも影響を受けると仮定

→導かれる仮説

(a)満たす環境がなかなかないような条件は，そうでない条件よりも低自尊心に関連

(b)ほとんどの人の条件を満たさないような環境は，そうでない環境よりも低自尊心に関連

(c)客観的環境の個人の特性的自尊心への影響はその個人の自己価値の条件に依存.

◇仮説(a)について

・他者の承認や行動に依存する自己価値の条件は自身の行動に基づくものよりも統制が困難であり，低自尊心に結びつきやすい.

→自尊心との相関：容姿=-.27，他者の承認=.-20(他者依存なもの)，美徳(自律的なも

[6] 各領域での行動やその結果が自己価値の判断にどの程度影響するかの主観的感覚を問う.

の)=.12

・但し，他者依存的な条件を持つ人でも，絶えず承認を獲得できるような環境にあれば，自尊心は高いと思われる.

◇仮説(b)について

・生活環境や行動の結果の特性的自尊心への影響は，自己価値の条件と，環境に対する解釈の傾向(条件を満足するものと捉えるかそうでないものと捉えるか)に依存すると考えられる.

・客観的に査定された環境は，特性的自尊心とせいぜい弱い関連しかもたない.

Ex.社会経済的地位(Twenge & Campbell, 1999)，学業での達成(Rosenberg et al.,1995)，学校での人気(Wylie, 1979 for a review)，他者からの肯定的評価(Shrauger & Schoeneman, 1979)身体的魅力(Brzezicki & Major, 1983)，体重(Miller & Downey, 1999)

◇仮説(c)について

・客観的環境と特性的自尊心の関連が弱いのには 2 つの理由が存在

①自尊心に影響するのは環境そのものではなくて，その環境の解釈.

←上記の研究に関して，主観的人気，主観的魅力，主観的学業成績が客観的なそれらよりもより特性的自尊心と関連するという知見

②環境は自己価値の条件と関連していると信じられている時のみ特性的自尊心に影響

←中年男性では社会経済的地位と自尊心の関連が強く(Twenge & Campbell, 1999)，男性よりも女性の方が容姿と自尊心の関連が強い(Brezicki & Major, 1983)

◇一般的には, 生活環境の自尊心に対する影響が自己価値の領域に依存するという発想は, 全体的自尊心を，主観的な重要性で重み付けした特定的な自己評価によって予測するという形で検証される.

→しかし, 重要性による重み付けが予測を改善することはほとんどない(Marsh,1986 等). 個人内の“相対的”重要性による重み付けは予測を改善(Marsh,1995 等)

➢Harter(1986，1993) : 魅力や運動能力等の領域における低自己評価は，それらの領域を重要としている生徒でのみ自尊心に関連．また，高自尊心な生徒はうまくやれていないと信じている領域の重要さを低く評価する傾向にあることを示す.

◇重要さの効果が見られない研究の問題

→単項目で重要性を測定しているため，自己価値の条件という概念を十分に捉えられていない．実際，筆者等の実施した研究では，重要性と自己価値の条件としての評価の相関は.49~.89 となっており，重要さは自己価値の条件のみならず，他の目標の達成における利用可能性などの要因にも影響を受けることが考えられる.

3-3.Contingencies of Self-Worth and State Self-Esteem

◇我々のモデルに従えば，自尊心の基盤となっている領域におけるイベントに応じて，状

態的自尊心は変動するはずである(先行研究ではイベントの影響は検討しているが，領域の効果を検討していない)

・検討に必要なもの

(a)領域特異的な自尊心の条件の個人差の尺度

(b)客観的に成功・失敗にカテゴリ化できる重要なライフイベントの測定

(c)イベントが起こる時期における状態的自尊心のくり返し測定

(d)自尊心の個人内変動がライフイベントにいかに関連するか，またその関連の強さの個人差を分析する方法

➢Crocker, Sommers, & Luhtanen(2000)←上記を備えた研究

■被験者：32 名の修士課程・博士課程受験生

■手続き

Step1:自尊心の条件尺度，抑鬱尺度（CES-D），どの大学院に申し込んだかのリストに記入

Step2:1 週間に 2 回+入試の結果が分かった日に調査用の Web サイトにアクセスし，状態版の Rosenberg 自尊心尺度，感情の尺度(Larsen & Diener,1992)，入試の結果について記入

Step3:自尊心の条件尺度(2 回目)，CES-D(2 回目)

■結果

○HLM での分析：レベル 1 の予測変数：イベント　レベル 2 の予測変数：自尊心の条件

→学校での遂行に自尊心の基盤をおいているほど，大学院への合格／不合格による自尊心の変動が大きい

･･･自尊心の変動は条件付の自尊心の特質ではなく，特定の条件とイベントのマッチングによるものであることを支持する結果

3-4.Contingencies of Self-Worth and Affective Reactions to Events

◇目標に関連したイベントは，より強い感情的反応を引き起こす(Lavallee & Campbell, 1995 等)．もし，価値ある人間になることが多くの人の目標であるとすれば，自尊心の基盤になっている程度の大きい領域ほど，強い感情的反応を引き起こすはず．

→上記の Crocker らの研究で支持する知見．学校での遂行に自尊心の基盤をおいているほど，ポジティブイベントによる快感情，ネガティブイベントによる不快感情の変動が大きい．

◇3-3 および 3-4 での知見から，自尊心と快感情・不快感情は同じものなのではないか，という疑問が提示されうる．しかし，学校での遂行に自尊心の基盤をおいていない被験者において，ポジティブイベントもネガティブイベントも自尊心には関係せず，快／不快感情のみに影響することから，自尊心と感情は別のものであると考えられる．

3-5.Contingencies of Self-Worth and Reactions to Ambiguous Events

◇日常人々が経験するイベントはあいまいであり，ポジティブさネガティブさの程度や，

あるいはイベント自体がポジティブかネガティブかさえ，本人の解釈による場合がしばしばある．･･･自尊心は本人のイベントの解釈によって変動する

➢Sommers & Crocker(2000)･･･上記仮説の予備的証拠

場面想定法を用い，あいまいなフィードバックに対して自尊心の条件に一致する方向で反応することを示す.

4.Contingencies of Self-Worth and Behavior

◇特性的自尊心の高低は，感情や人生の満足とは強く関連するが，行動の原因としては重要ではない.

…定義上特性自尊心はイベントに対して変動しにくく，行動への内的罰や報酬として機能しないため

◇一方，自尊心の条件は様々なルートで行動に影響する

・自尊心の条件が異なる人間は異なる状況を選び，その状況の圧力が行動に影響

・自尊心の条件が行動の基準となる

4-1.Contingencies of Self-Worth and Selection of Situations

◇人は自尊心の条件に関連したポジティブイベントを経験できるような状況，自尊心の条件に支持を与える状況を選択する.

→一旦状況が選択されてしまえば，自尊心の条件の個人差の影響はあまりなく，状況が行動を決定する(Snyder & Ickes, 1985)

→強い社会的影響があることで，新しい自尊心の条件が形成され，それによりまた状況の選択が影響を受け…という互恵的な過程

➢Crocker, Luhtanen, & Bouvrette(2001)

大学入学前に，容姿を自尊心の基盤として重要視していた女子学生は，入学後により社交クラブ参加する傾向が強く，麻薬や酒の消費量が多かった.

4-2.Contingencies of Self-Worth and Behavioral Self-Regulation

◇自尊心の条件は，行動の自己制御の基準として働くことで行動に影響

◇自尊心の条件となっている領域でのイベントに対しての自尊心の変動は，強い感情的・動機的・認知的結果をもたらす

◇自尊心の条件となっている領域でのイベントに対する感情的反応はより強いので，自尊心の条件とイベントに付随する自尊心の変動は，特性的自尊心の高低よりも強い動機的性質を持つ

→自尊心と行動の関連は自尊心の高低ではなく，自尊心の条件による

◇“～という人間になりたい”という上位の目標が，実際もしくは期待される行動に対する感情的反応を形成することで行動の自己制御を支えるという考え方は，心理学におい

ては良く浸透したもの
・上位目標の例：理想自己，自己指針(self-guides)，可能自己
しかし，これら全てが自己価値の基準を形成するわけではない．なぜなら自己価値の条件の核心はその条件を満たせば自分が価値である人間と信じることができるということである一方，上記のような上位目標は他者の期待や社会的環境からのメッセージを反映するためである．

◇他の基準と同様に，自尊心の条件となっている領域での失敗の苦痛を避け，成功の悦びに接近するためには様々な認知的・行動的方略が利用可能．
・目標状態と現状に乖離が知覚されれば，乖離の縮小を目的として行動が行われる．
・その試みが失敗に終わったとき，楽天的であればさらに努力をする．
・しかし，目標達成の望みが薄いときには，その目標からの撤退が生じる場合もある
心理的撤退：その領域を自尊心の基盤とすることを辞め，他に基盤を移す
ex.私は勉強はできないけどやさしい
・撤退を行わない場合の反応
：条件を満たせないような状況を物理的に避ける
：防衛的認知的反応を示す
：より上位の目標を満たそうとする

◇上記のような撤退や防衛反応は，自尊心の条件となっている領域でより強いと考えられる…生じるネガティブ感情が強いため．
→自尊心の条件は常に条件への適合行動を動機付けるわけではない．失敗後どのような行動が動機付けられるかには，成功への期待が重要な役割を果たす

<u>4-3.Can Changing Self-Esteem Ameliorate Social Problems？</u>
◇行動の自己制御に自尊心の条件が重要であれば，社会的に望ましくない，自己破壊的な行動の説明にもそれは役立つはずである．
・社会的な問題を低自尊心に帰属し，自尊心を高めることでそれを解決しようとするアプローチの失敗
…特性的自尊心の高低のみに焦点化し，条件や不安定性を考慮していないため
・社会的問題行動は，自尊心の低下を最小化し，自尊心の上昇を最大化するために行われると考える

◇社会的問題が起こる原因
・自尊心の条件達成の失敗の繰り返し→自尊心の条件からの撤退による
➢Steele(1992)：アフリカンアメリカンの大学生の高い落第率は，彼らを学問的に劣等とみなす環境下で学業達成に繰り返し失敗することによって，大学での達成を自尊心の基盤としなくなることによる．
・間違った条件に自尊心の基盤を置き，そこで高自尊心を獲得しようとすることによる
➢Geller et al.(1998)：自尊心の基盤を容姿に置くことが摂食障害の危険因子であること

を示す

・脆弱な自尊心への脅威に関連した不快感情が，問題行動に結びつく

➢Kernis & Waschull(1995)：高いが不安定な自尊心を持つ者は，自尊心への脅威を感じると怒りや敵意を感じやすい

➢不快感情から逃げるため，自己覚知を様々な方法で下げようとする

ex.飲酒，麻薬，むちゃ食い(binge eating)，etc…

・自尊心の基盤としてきわめて重要な領域では，問題のある方法を使ってでも成功しようとする

ex.ハーバードにどうしても行きたい学生がカンニングをする

⇒これらから分かるように, 自尊心は様々な問題行動の原因として実に複雑なもの. 勿論, 社会的問題の原因には貧困や教育機会の不平等など社会構造の問題も存在するが，それら問題は，個人が自尊心の条件を満たす機会を持ちうるか否かということへの影響を通して，社会問題へ寄与する.

5.Resolving Controversies of Self-Esteem

5-1.State Versus Trait

◇自尊心は性格特性か，心理的状態か？

自尊心は個人の安定した特性(Rosenberg，1979)という立場と状況によって変動するという立場(Leary et Al., 1995)

➢本モデルの立場：両方の特性を持つ.

5-2.Bottom-Up Processes of Self-Esteem

◇領域固有の評価により自尊心が形成されるという立場(James，1980)と自尊心が個々の領域でどの程度自己を肯定的に評価するか決めるという立場(Brown, 1997)

➢本モデルの立場：状態自尊心は自尊心の条件に関する成功・失敗により変動…前者の立場

5-3.Why Is Self-Esteem Sometimes Unstable？

◇Kernis らの研究：自尊心の安定性(個人内変動)には個人差があり，それは特性的自尊心の高低とは独立(Kernis et al.,1997)

→しかし，なぜこのような不安定性が生じるのかはよくわかっていない

➢Greenier et al.(1999)：外的に供給される，また内的に生成される快・不快経験の代謝による自己価値の感覚の脆さを反映

➢Crocker et al.(2000)：単なる測定誤差

➢自尊心が不安定な人は実際に極端なライフイベントを経験しているのかもしれない

◇本モデルの立場：自尊心の条件となっている領域で快・不快なイベントを経験する時に自尊心は不安定になる.

・この立場は，Kernis らのものと似ているが，複数の点で異なる

→Kernis らの研究では性格特性としての自尊心の不安定性を考えているが, 本モデルでは,

自尊心が全体的に不安定だと考えるのではなく，自尊心の条件となっている領域ではイベントが起こると不安定になりやすい，と考える．還元すれば自尊心の条件とイベントの相互作用を考える．
←前出の Crocker(2000)のデータ

5-4.Is High Self-Esteem Defensive or Genuine？

◇真に高い自尊心と防衛的自尊心の問題

➢Mikulincer(1995)：不安定型愛着の人が示す高自尊心が真に高いものではなく，ささいな欠点も受け容れられないことによるものであることを指摘

・真の自尊心：現実的に欠点や短所を認めながらも維持される内的な自己受容，自己価値の感覚(Rosenberg, 1979)

・防衛的自尊心：報告上は高いが，脅威に敏感に反応してしまう自尊心
→自己呈示によるもの(Wood et al.,1994)
→本人が気付かずに抑圧している場合(Sackheim, 1983, 1988)

◇防衛的自尊心の証拠･･･自我脅威情報への反応に関する研究

・高自尊心者よりも低自尊心者のほうが，自我脅威情報の妥当性や正確さを受け容れやすい(Brockner, 1984 等)

・高自尊心者は，自我脅威情報に対して，様々な防衛反応を示す
ex.フィードバックの正確さ，妥当性の否認，フィードバックの源の批判，失敗した領域の重要性の評価を低める，失敗を外的で不安定な要因に帰属する

◇自尊心の条件の個人差という観点からの考え方･･･自尊心自体が防衛的か,真実のものか,ということよりも自尊心が何に根ざしていて，その“何が”脆弱もしくは今脅威にさらられているかということに注目するほうが有効.

・自尊心の条件となっていない領域では，自尊心は脅威に対して強い．←認めても大して問題にならないため.

・一方，自尊心の条件となっている領域では，自尊心は脅威に弱い
←自己イメージに関連した脅威情報に人がより防衛的に反応することを示す知見(Sherman et al.,2000 等)

⇒防衛的自尊心は真の自尊心ではない，ということではなく，自尊心は不安定であり，防衛される必要がある，という主張

6.Resolving Paradoxes of Self-Esteem

6-1.The Paradox of Stigma and Self-Esteem

◇多くの社会心理学の理論からの予測：評価の低い集団に所属する者は，一般的に低自尊心を患うであろう ex 鏡映的自己(Cooley, 1956b)←しかし，スティグマ化された集団の成員が，そうでない集団の成員とほぼ同程度，時にはより高い自尊心を示すことが報告されている

◇矛盾に対するいくつかの説明

・Crocker & Major(1989)の説明

(a)否定的な結果を差別や偏見に帰属しているため

(b)自分の成果を，同じように差別されている内集団他者と選択的に比較しているため

(c)自集団が良い結果を修められない領域を，選択的に低く評価している

・スティグマ化されたアイデンティティは，それが自己概念の中心にあるものである場合にのみ，自尊心に影響を及ぼす(Rowley et al.,1998 他)

・本モデルからの説明：スティグマ化された集団の成員は，社会的地位が低いことによって影響を受けないような自己価値の条件を持つ．そのような条件が，社会的な低評価に遭遇した場合に，心理的柔軟性(resilience)となる．

→逆に他者の評価に自尊心の条件をおくことは，低自尊心の危険因子となる．

■アフリカンアメリカンの自尊心に関する考察

◇アフリカンアメリカンは，平均的に他のルーツを持つアメリカ人よりも自尊心が高い(Gray-Little & Hafdahl, 2000)･･･自尊心の条件の違いから説明可能

➢Crocker et al.(2000)：アフリカンアメリカンは，他者からの受容に自尊心の基盤をおかず，神の愛により基盤を置く傾向がある

➢Phinney & Chavira(1995)：アフリカンアメリカンの親は，他人は自分達に偏見を持っているが，それは自己価値には影響しないのだ，と子どもに教える．

➢Blaine & Crocker(1995)：アフリカンアメリカンの自尊心は宗教性とより強く関連

→Wolfe et al.(1999)：アフリカンアメリカンの学生は，ヨーロピアンアメリカンの学生よりも，他者の拒絶の後の自己価値の感覚の低下が少ない．この違いは，他者の受容に自尊心の基盤を置く程度によって完全に説明された．

また，自己価値の条件を他者からの受容に置くことと，人種的アイデンティティの肯定性には負の関連

→対人的な自尊心の条件をもつアフリカンアメリカンは，低自尊心への脆弱性を持つ．実際容姿，競争，他者の受容，学業達成に自己価値の条件を置くことは，アフリカンアメリカンにおいて自尊心のレベルと負の関連(Table2)

■体重の重い女性の自尊心に関する考察

◇欧米文化では肥満はスティグマ(Grandall, 1994)

→一般人も心理学者も,肥満の人は自尊心が低いだろうと予測･･･しかし弱い関連や矛盾する知見が示されるのみ．また，実際の体重ではなく，太っているという認知は多少説明力が高いものの, それでも自尊心の分散の 10%しか説明しない(Miller & Downey, 1999)

←肥満の人と普通の体重の人の比較から，肥満の人の低自尊心への脆弱性に影響を与える要因の特定に視点を移すべきという主張(Friedman & Brownell, 1995)

➢Quinn & Crocker(1998)：自己価値の条件が他者からの受容である場合，肥満の人が自分を肥満だと感じ，結果他人に嫌われると思う場合，特に低自尊心に陥りやすいと予測→実証的に確認

6-2.The Paradox of Aging and Self-Esteem

◇老年期には，人は様々な自尊心の基盤(ex.健康，身体的魅力，ソーシャルサポート)を失う･･･しかし，高齢者が低自尊心や心理的不健康，抑鬱を患っているわけではない

◇自尊心の条件から，このような矛盾に関して説明が可能

・高齢者の自尊心が低下しないのは，若年者とは異なる自己価値の条件を持つためであろう．

・逆に，失われていく領域に自尊心の基盤を置きつづける高齢者は，自尊心の低下を患うであろう

➢Frederickson & Roberts(1997)：歳をとっても容姿に自尊心の基盤を置き続ける女性は，ディストレスを感じやすい

・加齢とともに，人はより内的で内発的な意味を持つ条件を選択するであろう．

➢Selectivity Theory(Carstensen,1992,1993)

人が何を優先するかが加齢とともに変化するという理論．特に，人は加齢と共に，感情的に満足をもたらす有意味な関係に選択的に参与するようになる．

→同様のことが自尊心の条件に関しても起こるのではないか？

･･･容姿や能力など，一般的他者の受容が必要な条件から，神の愛など内的なものへ

⇒人は加齢に伴って選択的に自尊心の条件を最適化しようとする

6-3.Contingencies of Self-Worth and Vulnerability to Depression

◇本モデルでは，特性的な自尊心の高低よりも，自尊心の条件とネガティブなライフイベントが重要な危険因子であると考える．より特定的には，自尊心の条件となる領域でのイベントを経験することによって生じる自尊心の不安定性が抑鬱症状に寄与すると考える．

←抑鬱になりやすい人は特定の領域で脆弱な自尊心を持つと考える複数のモデルの存在(Beck et al.,1983; Higgins, 1987)

･･･性格特性と経験するイベントの種類のマッチングが抑鬱の先行要因と考える複数のモデル→しかし知見は一貫せず(マッチしないイベントでも抑鬱が高まる等)

◇本モデルでは，自尊心の不安定性が，自己価値の条件とそれに一貫するイベントの抑鬱に対する効果を媒介すると考える．

･･･恒常的に自尊心が低いことよりも,自尊心があるレベルから低下することのほうが苦痛が大きい．イベントにより自尊心の不安定性が生じることで，抑鬱に繋がる

➢前出の Crocker et al.(2000)は予備的証拠を提示

◇Pyszczynski & Greenberg(1987)：目標達成の失敗はよくあることだが，多くの場合，人は目標を廃したり，その重要性を非難することで容易に脱却を行う

←しかし，個人の自己価値にとって重要な目標を含む自己制御サイクルからは，簡単には脱却できないししたがらないであろう．達成できない目標に参与し続けることは自己覚知の増大や失敗の内的帰属，ネガティブ感情の増加を招き，それがひいては抑鬱

につながる．さらに，目標参与の継続は，その目標に関連したイベントを経験する機会を増やし，それゆえ自尊心が不安定になり，抑鬱につながると考えられる．

◇最近，抑鬱研究者が自尊心の不安定性が抑鬱の危険因子であるという発想を支持する知見を供しはじめている．

➢Roberts & Kassel(1997)：自尊心の不安定性と生活ストレスの交互作用が抑鬱症状の発症を予測，しかし感情の不安定性は予測しない．

➢Kernis et al.(1998)他：継時的な自尊心の不安定性(ストレスや特性的自尊心との相互作用あり？)が抑鬱の危険因子であることを示唆

→メカニズムは未だ不明．自尊心の不安定性は考え込み(rumination)や統制感の喪失，無力感といった心理的結果，コルチゾルやセロトニンの分泌といった生理的結果を招くのかもしれない．

7.New Questions

7-1.Where Do Contingencies of Self-Worth Come From？

◇自尊心の条件はどこから生まれ，なぜ個人差が存在するのだろうか？

・存在脅威管理理論の視点(Solomon et al.,1995)：自尊心は，文化的に構成された現実の中で価値の基準を満たすことによって得られる

←しかし，同じ文化内の違う個人が同じ自己価値の条件を持つわけではない．

・Bussey & Bandura(1999)：人は様々な影響の源を反映するプロセスを通して基準を形成する

・社会的集団や機関，家族は何が人を価値あるものにするのかという顕在的・潜在的基準を持っている→これを，個人が自己を判断する基準として内化

◇どの程度簡単に自己価値の条件は変化するのか？

・上位の自己価値の条件は，簡単には変化しないであろう

Crocker et al.(2000)：2ヶ月の期間を置いた2時点の測定で，自己価値の条件の相関は.60~.85．また，大学院入試での失敗は，自己価値の条件に影響を及ぼしていなかった．

・一方で，上位の自己価値の条件を満たすための下位の自己価値の条件は，先述のように簡単に変更される

➢Major et al.(1997)

アフリカンアメリカンとヨーロピアンアメリカンに知能検査を実施．半分の被験者には人種については全く触れず，もう半分の被験者には「テストが人種バイアスを含んでいる」と告げられる．その後，成績が悪かったというフィードバックを返す．

→アフリカンアメリカンの被験者は，前者の条件では自尊心がヨーロピアンアメリカンより低かったが，後者の条件では高かった

←人種に関する情報がない条件では高い成績をとるという条件に基盤を置いていたが，人種に関する情報がある条件では，そのような条件から脱却した(？)

7-2.Are Contingencies of Self-Worth Assets or Liabilities？

◇自尊心の条件が健康的か, またどれがどれより健康的なのかということについては, 様々異なった見方が存在

・Bowlby(1969), Rogers(1961)：安定した愛着や無条件の親からの愛に基づく自尊心は成人期の適応的な行動につながる

・Kernis & Waschull(1995)，Deci & Ryan(1995)：無条件な自尊心を持つことが好ましい

・Gecas & Schwalbe(1983)他：環境と上手く相互作用することによって得られる有能感が最善

・Mead(1934)：自己概念が他者の評価に敏感でなければ，適切に振舞うことはできない

・Leary ら：適応的な個人は条件付の自尊心を持つはずである(自尊心は関係価の指標であるから)

⇒自尊心運動とそれに付随する自尊心向上プログラムに対する批判に照らして，重要な意味を持つ

・学校は，生徒の実際の能力，容姿，人気に関係なく個々人が特別で，ユニークで，価値がある者だと励ますべきなのか？

・それとも客観的な達成，技能，能力に自尊心の基盤を置くようにさせるべきなのか？

→単純な回答はない，客観的な達成等に基づく自尊心の条件は上位目標として自己制御過程をガイドすることにより強い動機付けの効果をもつが，同時にその条件は脆弱性ともなり，失敗時に課題パフォーマンスを低めたり，情動焦点制御を強めたりするため.

→自己決定理論の分類(introjection と integration)は，自己価値の条件がもたらす動機付けにも該当する．したがって，自己価値の条件が動機付けの効果をもつといっても，それらはいくつかのアンダーマイニング効果を持ちうる.

◇無条件な自尊心が好ましいという主張に対して

→そのように考えるよりも，人が自尊心の基盤を置いている特定の領域に着目すべき．ある領域は他の領域よりも問題のあるものかもしれない. 再三述べているように,他者からの承認や妥当化が必要な条件はより低いもしくは不安定な自尊心に結びつくと考えられる.

➢Crocker et al.(2000)：自尊心の基盤を他者からの受容と容姿に置くことが，最も強く低自尊心と関連

◇自己価値の条件は多いほうがいいのか？少ないほうがいいのか？

・自己価値の条件が多ければ多いほど，脆弱性が多いとも考えられるし，動機付けが高まり，自尊心を維持する方法が多いとも考えられる

・自己価値の条件の多さが脆弱性になるか資源になるかを決定するのは 2 つの要因.

➢自己価値の条件間の関連性

Linville(1985,1987)多くの重要かつ独立な自己概念を持つ人は，不快なライフイベントに対して極端な感情的反応をしにくい

→互いに独立している自己価値の条件は資源となるであろう

➢特性的自尊心のレベル
高自尊心の人にとっては，自尊心の条件は主に自己に対する肯定感情を感じる機会を提供するであろう[7]

◇文化差の問題
・自己の構造と機能(Markus & Kitayama,1991)，自尊心の重要性と機能(Heine et al.,1999)の文化差
→文化によって自己価値の条件が，内容だけでなく機能に関しても異なる可能性
ex.日本人の自己改善のための自己卑下への注目
・・・日本人の自己価値の条件は，自尊心の低下には関連するが，自尊心の高まりにはあまり関連しないかもしれない．また，自尊心が重要でない文化の成員は，自尊心の条件となる領域で否定的な結果が得られるような状況に自分をおきやすいかもしれない．

7-3.Do Some People Have Noncontingent Self-Esteem?
◇条件付の自尊心と無条件の自尊心を区別する立場
➢Rogers(1951)，Deci & Ryan(1995)，Kernis & Washull(1995)
→これらのアプローチは,条件付自尊心の全体の性質の個人差を強調.一方で本論文では,条件となっている領域とそうでない領域で起こるイベントの個人内差に着目.

◇なぜ個人内差に注目するのか？
・そうすることが自尊心研究における複雑な問題を解決し，自尊心と社会的問題の因果関係を理解することを助けると考えるため
・全く無条件の自尊心を持つ人を特定することは極めて困難
→その人が無条件の自尊心を持っているのではなく，自己に関連した評価が下されない環境にいたり，自己価値の条件を常に満たす能力をもっていたり，自己覚知が低すぎるのかもしれない．←幸運に恵まれれば極稀にいる可能性は否定しない．

Conclusion(略)

[7] 前出の bottom-up の話と矛盾しないか？